

トルコギキョウに発生した花らい（蕾）腐敗病（新称）							
<p>【要約】県内のトルコギキョウの産地において、花らいが腐敗する症状が認められた。その病原菌が<i>Alternaria alternata</i>であることを明らかにし、病名を「トルコギキョウ花らい腐敗病」とすることを提案した。</p>							
三重県農業技術センター・生産環境部・病虫害担当					連絡先	05984-2-6360	
部会名	生産環境	専門	作物病害	対象	花き類	分類	研究

【背景・ねらい】

平成8年5月、松阪市のビニールハウスで栽培されているトルコギキョウにおいて、多量の花らいが腐敗する症状が認められた。腐敗した花らいあるいは変色した花弁は商品価値がなく、甚大な被害となったため、その原因を究明した。

【成果の内容・特徴】

1. 病徴：形成して間がない花らいでは、外部が薄く褐変し、開花時期になっても開花せず乾枯状態となる。また、比較的大きな花らいでは開花することがあるが、花弁の一部が薄く茶色に変色し汚斑状となる。変色した花らいでは、柱頭や雄ずいは黒色菌糸に覆われ、腐敗が進む。葉や花梗での症状は認められない（図1）。
2. 分離菌の同定：花らいからは*Alternaria*属菌が分離された。菌糸の生育適温は28℃、分生胞子は褐色、倒棍棒状、縦横に隔壁を有し、連鎖する。分生胞子の大きさは37~66μm×10~23μm、その内ピーク長は7~23μmである。これらのことから分離菌を*Alternaria alternata* (Fries:Fries) Keisslerと同定した（図2）。
3. 分離菌の病原性：「キングオブブルーピコティー」、「あずまの漣」を供試し、分離菌から得た分生胞子懸濁液を噴霧接種（2×10⁶/株）したところ、接種8日後には両品種とも幼い花らいを中心に明瞭に枯死し、症状が再現され、罹病部からは同一菌が再分離された。接種12日後には、発病花らい率が95%以上となった。本病原菌は強い病原性を示す（図3）。
4. 病名の提案：*Alternaria*属菌によるトルコギキョウの花らいや花弁を侵す病害は未記載であるため、病名をトルコギキョウ花らい（蕾）腐敗病（英名Bud blight）と提案した（平成8年10月11日、日植病関西部会一般講演）。

【成果の活用面・留意点】

花らい腐敗の原因が*Alternaria alternata*による病害であることから、防除対策の確立に向けて検討を進めることができる。

[具体的データ]

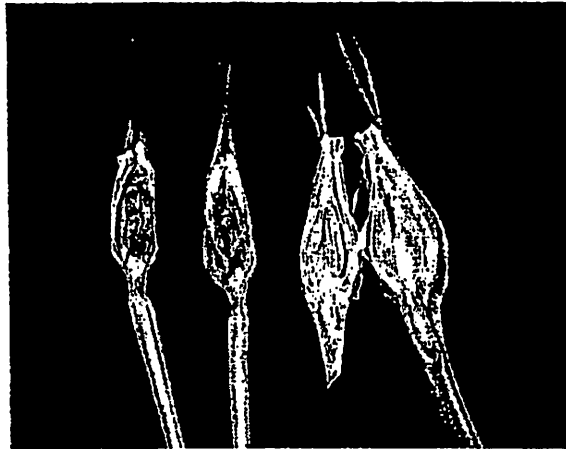


図1 トルコギキョウの花らい内部の腐敗症状
(左; 発病 右; 健全)

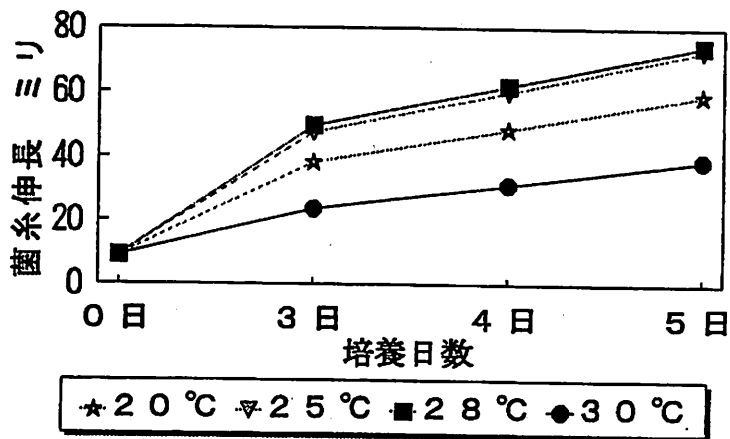


図2 トルコギキョウ花らい腐敗病菌の各温度での菌糸伸長

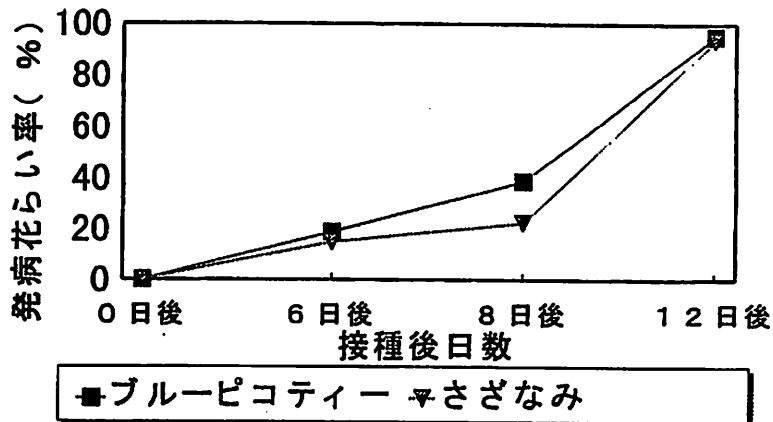


図3 接種試験による花らい腐敗の発生

[その他]

研究課題名: 新発生病害虫及び未解明障害の発生生態解明と防除技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 平成8年

研究担当者: 富川 章、黒田 克利

発表論文等: トルコギキョウに発生した花らい(蕾)腐敗病(新称), 日植病報62: 631 (講要), 1996